

山姥

常磐津 全詞章

常磐津 本名題『薪荷雪間の市川』 別題『新山姥』『市川山姥』 作詞者・作曲者・初演年不詳

四面峨々たる足柄山、麓にかよふ椎が本、巖に染まる葛がづら、君命うけて丈夫が

曲れる脰の高枕、実に一瓢の楽しみの、眼りを覚す山嵐、

山高うして雲行客の跡を埋む、君命うけて此日頃、斯く山賤と態を妾へ、深山幽谷嫌ひなく、往くなり次第の氣儘酒、眠た覺しにドリヤ一杯やるべいか

酒量りなきなき盃に、注げばうつらふ星の影、

アラ怪しやナア、客星爰にたたくなし、我が盆中に影さすは、さては一定人傑の、此山中に有といふ、天の知せか何にもせよ奇異なる事を見る物ぢやナア、ハハアこれでよめた、心当りは山住の、女がつれるいつもの子藏、ドリヤ一服喫で待べいか

鉦の袂引き妾へて、木の葉衣を露霜に、染めてあけるの山姥と、人や岩間の苔清水、心細道たどたと、杖に力に歩みくる

ヲヲ阿母今日はまだ逢ませぬの

ヲヲ山賤のよき威殿また焚火の御馳走しませうわいのう

夫は恭謝ねへ、ときに子藏はどうしましたな

さればいの、あとの麓まで連立つて来ましたが、大方猪猿を相手に、相撲がなとつて居ませうわいな

それは危ない早く爰へ呼ばつせへよばつせへ

ほんにマアおとましい事ではあるぞいのう

アアおとましとかち言、夫と見付けて

あれあれ御覧じませ、あのやうき大きな石を持あそんで、怪我でもしたらどうせうと思やるぞ、道草も程がある、コリヤ快童丸かいどうまるヤイ

ヲヲオ

神楽月とて片山里を、笛や太鼓で面白や、足の冷たいに草履買てたもれ、子をとろこをとろ、どの子が目つきあとの子が目つき、籠めこめ籠の中の鳥はいついつ出やる、夜明のばんに、つるつるつるつるつはいた、木の根笹原くぐりくぐつて、ひよいと出た稚子、

コレコレ怪童早うおぢやいのふ

アイ

母を慕ふて山道を、尋ね木咲の梅の花よき

かかおら斯般花折つて来たよ

花うちせうと振たてて惡戯盛りの爰らしき

ヤレ子藏よく帰つて来たな

ヲヲよふ戻つておぢやつたのう、サアサアいつもの通り、小父様へお辞儀ぢやお辞儀ぢや

ヲヲお辞儀がよく出来ましたかな

かか様何ぞ下されや

温順しう遊んでおぢやつた其褒美に、此間からあつかの衣織りて著せうと思ふてな、山路廻らぬ其閑に、五百機立る窓の内、枝の黄鳥糸繰り綿繰り織りて著せたる母の奔走子、

土産はでんでん太鼓にふり鼓、打つや空蟬のから衣、千声万声の砦に合す鼓の拍子、

面白や

サア是からが馬事ぢやうまごちや

ドレドレ俺が好物を食てやらう、此鉞刀を馬にして

母が囃してやりませう

月毛にあらぬ斧の駒、とるや手綱の凜々しげに

先のけさきのけ先のけろ

お月様いくつ

十三七つ

お供はいくつ

八十八つ

ほんにそりや若いなア

母の胎内蹴破つて

産所も産湯も山なれば、取上お婆に事を欠き、産湯の替りに四方の赤、浴せられたかどつこかも、真赤くなつて北嵯峨の、踊りのくときは

何と言た

おらが在所はな、奥山のててうちのでんぐりでんぐり、栗の木の根を枕に御座れ抱て転寐

かか様乳香まう

乳香みたいと足摺は頭足なき子の習ひかや

コレハしたりどうしたのも、サアサア是からまたいつもの山廻りの話をして聞かせませうぞや

なに山廻りの話

コイツは面白からうはへ

何のいなア昔語りも恥かしいありし姿も何処へやら、むめうの瀧に髪洗ひ、若葉を見ては春を知り、妻恋ふ鹿の音を聞きて、秋と思ふて深山路をあしたあしたの山廻り

よしあし曳の山廻り

四季の詠めもいろいろに

浮立つ空の弥生山、桃が笑へば桜がひざる、柳は風の応様

誰を待やら小手招く

霞の帯の辛氣らし、締めて手と手の盆踊り

七個の池に移氣の、うらみ過ぎの梶の葉は、露の玉章落初めて

焦れて濡す袖の梅、つい誑されて室咲の

梅の唇もいち早く

門に松たちやナンナつひ雛も、出るかと思へば香手鳥、菖蒲茸く間に盆の月、待宵過て菊の宴、はや祝月里神楽、ほんにほんに忙しき浮世も我も、白雪積る山廻りやままはり

ホホウ此程より心を付けて兎ふところ、探は柔弱非力を侮やも、横死を遂し坂田の蔵人が妻倅、此山中に籠ると聞しが若や二人は

いかにも其坂田の家を起さんと山神へ祈禱を懸け、則ちもうけし此快童

さてこそ我が推量に違はず時行が妻倅よな、さるにても女に稀なる志哀、その丹誠に山神の加護倅が勇力嘸あらん、力々の程がみたいみたい

おもちれへおもちれへ

コレコレ快童大切の所ぢや負けまいぞ

ヲヲ合点だ

神変不思議の快童丸、此方あしらふ勇力士、快童いらつて傍なる松を根こぎに引抜き、荒爾と笑つて立たりしは、人も恐るる計りなり

松の根こぎ面白、サア打つて来い快童丸

合点だ

打つて掛れば身を換し、すかさず強氣の力瘤、幹より胸の節くれて、しつかと抓めばめりめり

ゑんやゑんやと捻合ひしが、中よりやつと捻切つて、左右へ分れて立たりしは、目覺しかりける次第なり

ホヲ力の程は見たみえた、今よりしては頼光公の家臣となし、父が家名を其儘に、坂田の金時と名乗らせん喜べようこべ

ハハア有難や恭謝なや、コリヤ快童今日から坂田の金時といふ武士に成のぢやが嬉しいかや

そんなら俺は武士に成のか嬉しいうれしい